

まえほ 前穂通信

ゆつくりゆつたり剣山

杉本 増生



「コトビ〜紅茶〜どっちにする〜」
と答えて、まだ何か言いたそう。
注文台となりの陳列ケースの目をやり、
「ドオナツ〜」
三種類ある真ん中の指さして、動かない。
「うん〜よっしゃ。ドーナツも頼むか〜」
いつもの日帰りガイドなら、節約を宗とされているため、
ちんになる杉本。けれども今日は、年に一度の宿泊登山の
初日で特別やツと、気がおとくなる。
席に着いた真規雄さんは、チョコレートドーナツをばく
ついで下機嫌です。
江利夫さんも穂津男さんも、飲物を手に、それぞれの相
棒スタンプともくくついでいる。
三泊四日の登山プログラム―われら前穂登山隊六
人の期待が高まってきた……。

| | |
|-----|---|
| 発行日 | 2016年 11月1日 |
| 発行元 | 自立センター 前穂 〒569-1022 高槻市日吉台 1番町21-18 072-689-8600 |



昨日からの雨は上がったものの、うつつらと霧が流れて
いる。宿の車で見、越登山口まで送ってもらい、歩きたし
たところ。
今日の行程は、標高一九五五メートルの剣山頂上ヒュッ
テまで二時間半、そこで宿泊手続をすませ、二キロ先の兄
弟峰次郎(一九三〇)メートル往復に二時間。昼食と休
憩時間を含めて六時間もあれば充分でしょう。
ブナの巨木のあいだをゆるゆると通る山腹道。雨露に濡
れ光る樹々の緑が霧にかすんで、深山のおもむき満点です
杉本隊長を先頭に、柴田隊員が後尾を固めてのんびりと
山歩きを楽しむ。
その時、下のほうから、ヒューンと静寂をそとくぐりぬけて
鋭いけれどやわらかい響きが……。鹿の鳴声です。
「あっ、鈴を忘れた〜」
真ん中を歩いている松原隊員の声。
「熊よけの鈴、宿に置いてきた〜」
背負ったザックからは別に、肩から掛けた鞆の中を掻きま
わして、三ツツの白馬天狗原登山の時から使っている、
た、自慢の金の鈴です。その鈴を、よく徹る響きは、皆も
聞き馴染んでます。
「あつた、よかつたア〜」
見つけた金鈴をザックに取りつけ、チリリンと鳴ら
すねエ……熊に会ったら、犬ごころじゃないよ〜」
「イヌわいッ」

自立センター前穂代表松原隊員の発案で始まったこの
登山プログラム、今回で九年目です。その松原隊員の、昨夜
の宿(ラフォーレ山)でのこと。
雨のせいお宿泊者はわれら六人だけ、食器洗い切りにぎ
やかに夕食です。あめ〜溪流魚の空揚げ、野菜の煮付、お
吸物、豚しゃぶ鍋。そして鍋を平らげたあとは、うどん鍋
にして、最後は雑炊……小まめに供給してくれる初老の
「夫婦に、松原が前穂登山隊の概要を説明する。
「そうですか〜皆さん、楽しんでる〜いいですね〜……」
「夫婦とも好感をもってくださってるのが、自然と伝
わってきます。予約受付時に松原代表から聞かされた説
明とあわせて、われら六人の状況への正しい理解が、そうさ
せているの、どうですか。」
「皆さん、どうぞ楽しんでくださいよ〜」
二つの土鍋を空にして食べつづりのいいゲストさんたちに
に、おかに雑炊のお代わりを勧め、
「園長先生も、どうぞ……」
「園長先生にも促す。
翌朝、出発する時には、
「おかげさまで、気がなな〜、くつがせていただきました。
ありがとうございます。」
「やあ、わたくしどもも、皆様のおかげで、大変いい気持
でお給仕させてもらいました。ぜひ、またお越しくださいま
せ、園長先生。」
と、夫婦並んで、笑顔で見送ってくださいました。
「園長先生、はよかつたすねエ。前穂に帰っても、園長
先生、通しはつたらええのね……」
見、越登山口むむ車内で、柴田隊員と杉本隊長は、
小声でうなずきました。

剣山頂上ヒュッテに荷物を置き、六人分の雨具と弁当を
スタンプ三人で分担して、兄弟峰の次郎(一九三〇)まで
晴れれば、ミヤサにおおわれれた草履の履きかきかき
素晴らしい緩急歩になるのに、乳白色の霧ばかりで、ま
ばりです。おまけに、小雨まではらつきはじめる。中間地点
の窪地で、雨具をつけて弁当を使う。食べ終わり、残念なが
ら、雨まで、見えな次郎(一九三〇)まで、引き返しました。
「四国最高所」とヒュッテが自慢するお風呂に入ったあと
は、夕食まで六人部屋で、さうさお風呂に、お
やつを食べたり……。宿泊者は、われわれのほかは一人だけ
なされた、たつぷりお代わりして満足でした。

部屋に戻り、満腹のお腹を横たえ、またころ……。
雨のせいでおかけて、ほんとうに、ゆつくりゆつたりりの剣
山です。
翌朝は、登山三日目にして、やっと晴れてくれました。今日
日は、往路を引き返し、瀬戸大橋を渡った所にある、せど
うち見高ホテル泊、あわてて下山する必要はない。
すぐ上の頂上展望台で、四囲の大観をほし、ままにする。
秋晴の空を背景に、堂々たる山容の次郎(一九三〇)を、青々
と足元は、広大な笹原の山上に設けられた板敷の展望台
―百畳敷の広さで、青天下の眺望と相俟って、まことに
気分爽快です。
「晴天を恵んでくださった山の神様に感謝をささげましよ
松原隊員が次郎(一九三〇)にむかって一礼合掌すると、
「タカマツ(二万五千里)マカマカ(二万五千里)ミトウ
マカマカ……」
音吐朗々と唱え、いつもテレビのコーシャルソング
などを明るく口ずさんでいる江利夫さん顔負けの朗誦です。
これは、天降詞(あまのつと)と言って、大学生時代に
憶えたものだそうです。そして、十三年前、自立センター
へ前穂独立を決議して伊勢神宮に参拝した時にも唱えた
と、か。
これは負けておれじと、杉本隊長も次郎(一九三〇)にむいて一礼
合掌。
「カンザイイホサツキヨウジン(二万五千里)ミタシヨウケン
ゴウカイクドウマカマカ……」
「い、すねエ、神道と仏教、これで神仏公平になりました。
……柴田さん、あなたも何か……。……うん、出ませ
んか。……だつたら、高槻音頭でも……」
困ったような、呆れたような顔で、柴田隊員は、次
郎(一九三〇)にむきなり、黙って一礼合掌しました。
さて、その間、江利夫さんは、百畳敷の展望台を行ったり
来たり、元気がいい。端まで行って、あわや、と見ると、
それに対して、真規雄さんは、百畳敷の中央にじっと佇ん
で腕組みし、遠くの山並に顔をむけて、何やら哲人的風貌
を呈している。

穂津男さんとは見れば、百畳敷狭しと動きまわり、場所
を決め、最適の構図を選んで、趣味の写真撮影に余念が
ない。
「皆さん、せつかくのお天気です、全員で記念撮影しま
しようよ。」
スタッフの独演会はおしまい、松原園長先生は三人を呼
び集めて、手持ちの携帯電話に、スマートフォンにと、ばち
ばちと記念の映像を収めていく。
記念撮影のあとは、肩に掛けた鞆からおやつを取り出し
て、これがい、あれがい、と、じゃんけんを分配……。に
まやかに、ゆつくりゆつたり、剣山での時間が過ぎていき
ます。

四日目、登山プログラムの最終日です。
立派な観光ホテルでの昨夜の食事は、上品な会席料理。
前菜として半月盆に調えられた季節の彩り盛り合わせは
実に優美で、見ていただけで、お正月気分です。なるほど、松
原代表が近辺の宿をいくつか下見にきて、施設も従業員の内
対応も一番、上折紙を付けただけのとは、ある。
お給仕として折紙を付けたのは、高校卒業二年目の娘さんですが、
これまた上品優美な接待ぶり。その上、われわれ仲間
に対する理解と好意も、持ちあわせられて、いい気分。
お嬢さんに影響されて、昨日一昨日とお代わりし放題
だったゲストさんも、小さな茶碗によそわれた松茸木
ノ子御飯のお代わりは、一杯にためるといって上品ぶり
でした。
そして朝食は、総ガラス張のレストランで、ブレイクフ
ァーの呼称がさわしい洋食です。ヘアンと名札を付け
た若いフリービーン女性に、流暢な日本語で給仕され、ま
みは大きな籠に入った、十種類全部頂戴する。(ちな
みに、アンチさん、日本ではクロワッサンと呼ぶ三日月
を、何度聞きなしても、クルッスアンと発音してはりま
した。)
そのあと次々と出てくる料理皿を平らげて、皆さん、ま
まに満足です。
食べ終わって、六人の仲間、窓外を眺めてゆつくり食休
大小の島々が、重なり、そのあいだに、海が朝陽を照
り返してきらめいている。
船腹を赤く塗り分けたタンカーが、瀬戸大橋を漕ぎ抜け
ゆつくりゆつたりと航行していく。ちよっつと見には、動い
ているのか、停止しているのか……。
瀬戸大橋をせかせかと走行する自動車と違つて、実に悠
然たる移動ぶりです。
「あしたから、また忙しい日常がはじまりますねエ。楽しい
四日間でしたな〜……真規雄さん、江利夫さん、穂津男
さん。」
園長先生の促して、前穂登山隊六人、名札を惜しみ
ながらチェックアウトをすませました。

付記
岡山駅で新幹線に乗り換える前に、途中下車して
お城見物をしました。そのお城の天守閣内では、羽
織袴のお殿様スタイル、ちよんまげ、力、扇子付きで
脇息に肘をかけ、自由に写真撮影させてくれると
いって、無料サードスペースを発売。スタッフ一同、それぞ
れ相棒のお殿様に忠臣よろしく、這い這いして、ぼつ
写真を撮ってもらおうと、楽しんで、楽しま、楽しま、
た。詳しく描写したいのですが、紙幅がないので、
以上、簡単にお知らせします。
なお、ゲストさんの名前は仮名です。

部屋に戻り、満腹のお腹を横たえ、またころ……。
雨のせいでおかけて、ほんとうに、ゆつくりゆつたりりの剣
山です。
翌朝は、登山三日目にして、やっと晴れてくれました。今日
日は、往路を引き返し、瀬戸大橋を渡った所にある、せど
うち見高ホテル泊、あわてて下山する必要はない。
すぐ上の頂上展望台で、四囲の大観をほし、ままにする。
秋晴の空を背景に、堂々たる山容の次郎(一九三〇)を、青々
と足元は、広大な笹原の山上に設けられた板敷の展望台
―百畳敷の広さで、青天下の眺望と相俟って、まことに
気分爽快です。
「晴天を恵んでくださった山の神様に感謝をささげましよ
松原隊員が次郎(一九三〇)にむかって一礼合掌すると、
「タカマツ(二万五千里)マカマカ(二万五千里)ミトウ
マカマカ……」
音吐朗々と唱え、いつもテレビのコーシャルソング
などを明るく口ずさんでいる江利夫さん顔負けの朗誦です。
これは、天降詞(あまのつと)と言って、大学生時代に
憶えたものだそうです。そして、十三年前、自立センター
へ前穂独立を決議して伊勢神宮に参拝した時にも唱えた
と、か。
これは負けておれじと、杉本隊長も次郎(一九三〇)にむいて一礼
合掌。
「カンザイイホサツキヨウジン(二万五千里)ミタシヨウケン
ゴウカイクドウマカマカ……」
「い、すねエ、神道と仏教、これで神仏公平になりました。
……柴田さん、あなたも何か……。……うん、出ませ
んか。……だつたら、高槻音頭でも……」
困ったような、呆れたような顔で、柴田隊員は、次
郎(一九三〇)にむきなり、黙って一礼合掌しました。
さて、その間、江利夫さんは、百畳敷の展望台を行ったり
来たり、元気がいい。端まで行って、あわや、と見ると、
それに対して、真規雄さんは、百畳敷の中央にじっと佇ん
で腕組みし、遠くの山並に顔をむけて、何やら哲人的風貌
を呈している。

穂津男さんとは見れば、百畳敷狭しと動きまわり、場所
を決め、最適の構図を選んで、趣味の写真撮影に余念が
ない。
「皆さん、せつかくのお天気です、全員で記念撮影しま
しようよ。」
スタッフの独演会はおしまい、松原園長先生は三人を呼
び集めて、手持ちの携帯電話に、スマートフォンにと、ばち
ばちと記念の映像を収めていく。
記念撮影のあとは、肩に掛けた鞆からおやつを取り出し
て、これがい、あれがい、と、じゃんけんを分配……。に
まやかに、ゆつくりゆつたり、剣山での時間が過ぎていき
ます。

四日目、登山プログラムの最終日です。
立派な観光ホテルでの昨夜の食事は、上品な会席料理。
前菜として半月盆に調えられた季節の彩り盛り合わせは
実に優美で、見ていただけで、お正月気分です。なるほど、松
原代表が近辺の宿をいくつか下見にきて、施設も従業員の内
対応も一番、上折紙を付けただけのとは、ある。
お給仕として折紙を付けたのは、高校卒業二年目の娘さんですが、
これまた上品優美な接待ぶり。その上、われわれ仲間
に対する理解と好意も、持ちあわせられて、いい気分。
お嬢さんに影響されて、昨日一昨日とお代わりし放題
だったゲストさんも、小さな茶碗によそわれた松茸木
ノ子御飯のお代わりは、一杯にためるといって上品ぶり
でした。
そして朝食は、総ガラス張のレストランで、ブレイクフ
ァーの呼称がさわしい洋食です。ヘアンと名札を付け
た若いフリービーン女性に、流暢な日本語で給仕され、ま
みは大きな籠に入った、十種類全部頂戴する。(ちな
みに、アンチさん、日本ではクロワッサンと呼ぶ三日月
を、何度聞きなしても、クルッスアンと発音してはりま
した。)
そのあと次々と出てくる料理皿を平らげて、皆さん、ま
まに満足です。
食べ終わって、六人の仲間、窓外を眺めてゆつくり食休
大小の島々が、重なり、そのあいだに、海が朝陽を照
り返してきらめいている。
船腹を赤く塗り分けたタンカーが、瀬戸大橋を漕ぎ抜け
ゆつくりゆつたりと航行していく。ちよっつと見には、動い
ているのか、停止しているのか……。
瀬戸大橋をせかせかと走行する自動車と違つて、実に悠
然たる移動ぶりです。
「あしたから、また忙しい日常がはじまりますねエ。楽しい
四日間でしたな〜……真規雄さん、江利夫さん、穂津男
さん。」
園長先生の促して、前穂登山隊六人、名札を惜しみ
ながらチェックアウトをすませました。

付記
岡山駅で新幹線に乗り換える前に、途中下車して
お城見物をしました。そのお城の天守閣内では、羽
織袴のお殿様スタイル、ちよんまげ、力、扇子付きで
脇息に肘をかけ、自由に写真撮影させてくれると
いって、無料サードスペースを発売。スタッフ一同、それぞ
れ相棒のお殿様に忠臣よろしく、這い這いして、ぼつ
写真を撮ってもらおうと、楽しんで、楽しま、楽しま、
た。詳しく描写したいのですが、紙幅がないので、
以上、簡単にお知らせします。
なお、ゲストさんの名前は仮名です。

部屋に戻り、満腹のお腹を横たえ、またころ……。
雨のせいでおかけて、ほんとうに、ゆつくりゆつたりりの剣
山です。
翌朝は、登山三日目にして、やっと晴れてくれました。今日
日は、往路を引き返し、瀬戸大橋を渡った所にある、せど
うち見高ホテル泊、あわてて下山する必要はない。
すぐ上の頂上展望台で、四囲の大観をほし、ままにする。
秋晴の空を背景に、堂々たる山容の次郎(一九三〇)を、青々
と足元は、広大な笹原の山上に設けられた板敷の展望台
―百畳敷の広さで、青天下の眺望と相俟って、まことに
気分爽快です。
「晴天を恵んでくださった山の神様に感謝をささげましよ
松原隊員が次郎(一九三〇)にむかって一礼合掌すると、
「タカマツ(二万五千里)マカマカ(二万五千里)ミトウ
マカマカ……」
音吐朗々と唱え、いつもテレビのコーシャルソング
などを明るく口ずさんでいる江利夫さん顔負けの朗誦です。
これは、天降詞(あまのつと)と言って、大学生時代に
憶えたものだそうです。そして、十三年前、自立センター
へ前穂独立を決議して伊勢神宮に参拝した時にも唱えた
と、か。
これは負けておれじと、杉本隊長も次郎(一九三〇)にむいて一礼
合掌。
「カンザイイホサツキヨウジン(二万五千里)ミタシヨウケン
ゴウカイクドウマカマカ……」
「い、すねエ、神道と仏教、これで神仏公平になりました。
……柴田さん、あなたも何か……。……うん、出ませ
んか。……だつたら、高槻音頭でも……」
困ったような、呆れたような顔で、柴田隊員は、次
郎(一九三〇)にむきなり、黙って一礼合掌しました。
さて、その間、江利夫さんは、百畳敷の展望台を行ったり
来たり、元気がいい。端まで行って、あわや、と見ると、
それに対して、真規雄さんは、百畳敷の中央にじっと佇ん
で腕組みし、遠くの山並に顔をむけて、何やら哲人的風貌
を呈している。

穂津男さんとは見れば、百畳敷狭しと動きまわり、場所
を決め、最適の構図を選んで、趣味の写真撮影に余念が
ない。
「皆さん、せつかくのお天気です、全員で記念撮影しま
しようよ。」
スタッフの独演会はおしまい、松原園長先生は三人を呼
び集めて、手持ちの携帯電話に、スマートフォンにと、ばち
ばちと記念の映像を収めていく。
記念撮影のあとは、肩に掛けた鞆からおやつを取り出し
て、これがい、あれがい、と、じゃんけんを分配……。に
まやかに、ゆつくりゆつたり、剣山での時間が過ぎていき
ます。

四日目、登山プログラムの最終日です。
立派な観光ホテルでの昨夜の食事は、上品な会席料理。
前菜として半月盆に調えられた季節の彩り盛り合わせは
実に優美で、見ていただけで、お正月気分です。なるほど、松
原代表が近辺の宿をいくつか下見にきて、施設も従業員の内
対応も一番、上折紙を付けただけのとは、ある。
お給仕として折紙を付けたのは、高校卒業二年目の娘さんですが、
これまた上品優美な接待ぶり。その上、われわれ仲間
に対する理解と好意も、持ちあわせられて、いい気分。
お嬢さんに影響されて、昨日一昨日とお代わりし放題
だったゲストさんも、小さな茶碗によそわれた松茸木
ノ子御飯のお代わりは、一杯にためるといって上品ぶり
でした。
そして朝食は、総ガラス張のレストランで、ブレイクフ
ァーの呼称がさわしい洋食です。ヘアンと名札を付け
た若いフリービーン女性に、流暢な日本語で給仕され、ま
みは大きな籠に入った、十種類全部頂戴する。(ちな
みに、アンチさん、日本ではクロワッサンと呼ぶ三日月
を、何度聞きなしても、クルッスアンと発音してはりま
した。)
そのあと次々と出てくる料理皿を平らげて、皆さん、ま
まに満足です。
食べ終わって、六人の仲間、窓外を眺めてゆつくり食休
大小の島々が、重なり、そのあいだに、海が朝陽を照
り返してきらめいている。
船腹を赤く塗り分けたタンカーが、瀬戸大橋を漕ぎ抜け
ゆつくりゆつたりと航行していく。ちよっつと見には、動い
ているのか、停止しているのか……。
瀬戸大橋をせかせかと走行する自動車と違つて、実に悠
然たる移動ぶりです。
「あしたから、また忙しい日常がはじまりますねエ。楽しい
四日間でしたな〜……真規雄さん、江利夫さん、穂津男
さん。」
園長先生の促して、前穂登山隊六人、名札を惜しみ
ながらチェックアウトをすませました。

付記
岡山駅で新幹線に乗り換える前に、途中下車して
お城見物をしました。そのお城の天守閣内では、羽
織袴のお殿様スタイル、ちよんまげ、力、扇子付きで
脇息に肘をかけ、自由に写真撮影させてくれると
いって、無料サードスペースを発売。スタッフ一同、それぞ
れ相棒のお殿様に忠臣よろしく、這い這いして、ぼつ
写真を撮ってもらおうと、楽しんで、楽しま、楽しま、
た。詳しく描写したいのですが、紙幅がないので、
以上、簡単にお知らせします。
なお、ゲストさんの名前は仮名です。